

第 5 次シリア地震災害ボランティア(2023 年 8 月 7 日-18 日)

(社)神戸国際支縁機構 代表 岩村 義雄
「カヨ子基金」代 表 佐々木 美和

主題聖句

主題聖句 ヤコブ 5 章 3 節 「金銀もさびてしまいます。このさびが、あなたがたを訴える証拠となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くすでしょう。あなたがたは、この終わりの日々によりながら、宝を蓄えたのです」(『聖書協会共同訳』)。

<序>

新鮮な乳の流れる土地で

2023 年 2 月 6 日 4 時未明、トルコ南東部のシリア国境近くガジアンテップを震源に発生した地震、孤児の施設を建造するために最大の被害地アレッポを訪問。アレッポはアラビア語では「新鮮な乳」の意味の「ハラブ」と呼ばれる。聖書に登場する「乳と蜜の流れる土地」に通じる名前である。シリア地方で最古の都市の一つで、古代にはハルペの名で知られた。

シリア全体のうち、アレッポ、イドリブ、ハマとラタキアは最も甚大な被害を受け、56,000 人が影響を受けたとされる。公式な死者数はアレッポのみで 474 人とされるが、現人口 3 万~4 万人のうち約半数の 2 万人が被災し、倒壊数は町の 70~80 パーセントと述べる住民もいる(2023 年 8 月 11 日, 12 日, 13 日現地聞き取り)。

出発前「世界はなぜシリアに冷たいのか」

神戸国際支縁機構の海外部門
「カヨ子基金」(代表佐々木美和)
は現地のバヘード夫人から連絡を
受けた(写真 1, 2)。

写真 1. バヘード夫人から送られた写真。
地震で崩れ落ちた夫人の友人の家。



カヨ子基金は、5年前にシリア北部の都市アレッポに孤児の家「カヨコ・チルドレン・ホーム」を開設。シリア正教徒のバヘード夫妻が孤児たちの世話を担ってきた。ネリー・バヘード夫人¹(52)から、地震に対する恐怖だけでなく、シリア・トルコ両国間の支援の格差に対する怒りの声が、アレッポの人々の間にあると聞いた。「世界はなぜシリアには冷たいのか。トルコには各国が飛行機で救援物資を届けている。一方、シリアには全くと言っていいくらい救援物資が運ばれていない」と。



写真 2. バヘード夫人から送られた写真。地震の影響の落下物によって大破した自動車。

¹ バヘード夫人は、アルメニア教会(メルキト・ギリシャ典礼カトリック教会)で育った。典礼言語には古代アラム語の一種である古典シリア語を用いる。映画「パッション」で、イエスや弟子たちが話していた言語はアラム語である。カトリックという名称が含まれていても、ローマ・カトリック教会と混同してはならない。東方教会の多くは自分たちを「カトリック」と称するが、バチカンのローマ教皇を頂点とするローマ・カトリック教会と異なる。日本ではカトリックとプロテスタントが主流のため自分たちをカトリックと称するアラブ・オーソドックスについてほとんど知られていない。

ウクライナの比ではない世界最多難民「なんのための制裁か」助かる命を見殺しにするな

「孤児の家を建てたい」戦渦にあつて地震後、現地から立ち上がる

カヨ子基金がアレッポに孤児の家を開設したのは、バヘード夫妻が所属するシリア正教会のアレッポ大主教グレゴリオス・ヨハンナ・イブラヒムとの約束による。



写真 6: 消息が絶たれたイブラヒム大主教(右), 岩村義雄代表(左) 世界宗教者平和会議(WCRP) 京都 2012年 8月4日



7: シリア正教会正面玄関の画像
イブラヒム主教(左)と現主教(右)
2023年8月10日

2006年の世界宗教者平和会議(WCRP)で出会い、内戦勃発翌年の2012年に再会を果たした。そのとき、アレッポに孤児の家を開設することを共に祈り、約束した。

しかし、イブラヒム大主教は2013年にテログループに誘拐され、消息が絶たれた。2017年、イブラヒム大主教の消息が分からない状況のまま、孤児の家を開設するためアレッポに向かった際に出会ったのが、孤児たちの世話を担うバヘード夫妻である。

バヘード夫妻が現地で孤児の世話を引き受けている間も内戦は継続し、夫妻が所属する正教会も、増加する孤児の状況を深刻に受け止めていた。2011年の内戦勃発以降、見境のない爆撃により住民の家屋を含めた家々が激しく損壊した。先祖代々引き継いだ家を後にしなければならなくなった住民、なによりも保護者を亡くした孤児が急激に増加した。以前と比べものにならないほどの孤児の数を前に、どうすればいいのかシリア正教会において悩み続けていた。

今回の地震で、バヘード夫妻とカヨ子基金にシリア正教会側から協力の申請があった。シリア正教会所有の土地(300m×300m)に、障がい児を含めた68名が暮らせる孤児の家建設の青写真が「カヨ子基金」に送られてきた(写真8)。カヨ子基金では100万円を第一段階に募った。公益財団法人神戸新聞厚生事業団なども協力してくださった。次なる目標をみなさまにお願いさせていただく。



写真 8: 孤児の家の建設予定地 2023 年 8 月 11 日

戦争が日常化した国々／国交のないシリア入国

シリア入国前に、レバノン・ベイルートに到着した。ベイルートの経済は「破綻している」と大学生の若者に言わしめる状況にある(2023 年 8 月 13 日聞き取り)。ベイルートをはじめレバノンやシリアでは、車を持たない人々のための安価な移動手段として地元の配車サービス(「タクシー」と呼ばれる)が存在する。ベイルートからアレッポ間は飛行機、バスが存在したが、現在はタクシーでしか移動手段がない。シリア入国前のベイルートから利用した。11kmで4USドル。乗せてもらい、移動途中で運転手のアリさん(24)に「port」と指をさされた。港だ。アリさんは突然大きな声で「boum!」と表現した。爆弾がこの港に落ちたんだ、と説明された。シリア、シリア近辺では珍しくない日常会話である。

国境を超える際には運転手が乗客のパスポートを持ち走り回る。国境を超える前も、超えてからも、特にシリアでは国道沿いに設置された「関門所」において何度も「関門所料」を払わされる。1000 シリアポンド。日本円で 8 円ほどである。ときには倍以上請求されることもある。煙草などの嗜好品を納める場合もある。そのときどきの役人によるのだ。断れば関門を通ることができない。筆者らと同じタクシーに乗り合わせたマジドさん(35)は「戦争が始まってからこうなった」という。

「破綻している」と形容されたバイルートからさらに「悪い経済状態だ」と言われるのがシリア・アレッポの現状である(写真 9～12)。公務員の月収入は換算して 10USドル(日本円約 1500 円)である。



写真 9: アレッポ市内中心部。馬が闊歩する。 アレッポ 2023 年 8 月 10 日



写真 10: アレッポ市内中心部。プラスチック容器を売る店は珍しく、目を引く。
アレッポ 2023 年 8 月 10 日



写真 11: アレッポ市内中心部。黄色いタクシーが走る。 アレッポ 2023 年 8 月 10 日



写真 12: 出稼ぎに行った親の帰りを待ちわびている子どもたち。
赤ちゃんの人形を三人で分け合う。旅人である筆者に「I love you」とあいさつしてくれた。
アレッポ 2023 年 8 月 10 日

内戦が続く中で、レバノンポンドと同様、シリアポンドはインフレーションが続く。現在1USドルはおおよそ13万シリアポンドである。札束は1センチ近くの厚みがある。それだけあればアレッポ市内で何名も養える朝ごはんが安価に手に入る。一方で、その値段にさえ手が届かない生活をする人々がいる。バヘード夫妻の元で働くマーラク(30)(写真13)、アラビア語で天使という意味の名を持つ心優しい彼女は、戦争勃発後に離婚した。



写真13: マーラク(30) アレッポ 2023年8月10日

5歳児を育てるシングルマザーとして生計を立てる。働き者の彼女だが、現状では1USドルもしない朝ごはんを買うことはかなわない。

家と親をなくし子どもははたらく

シリア入国にいたるまでの道すがらにおいても、シリアに入ってから、シリア難民の子どもたちやシリア在住の子どもたちは、よくはたらく。家族を助けるためである。ベイルートでは難民の孤児たちが近づきお金を求める。多くは手を差し出しながら「スーリ」と言い、「マダム」と呼びかける。「スーリ」、すなわち、「シリア」から来た難民だという意味である。「ババ」すなわち、お父さんがどこかへ行ってしまった、と言う。レバノンのお金で「1000ポンド」を欲しい、と口々に求める。日本円で9円ほどの額である。

孤児でなかったとしても、障がいを持つ両親のために、と、しっかりとした口調でお金を求めてくる殊勝な子どもたちがいる。「お父さんが手がなくて、お母さんが足がなくて」

と説明する。別れるときには、お金を求めていたことなど忘れて笑顔で車を追いかけ、もらった日本からのおもちゃを嬉しそうに掲げたり、おどけた表情を見せたり、手を振り続けてくれた。あどけない子どもたちである(写真 14)。



写真 14: 障がいを持つ両親のためにはたらくシリアの子どもたち レバノン 2023年8月10日

あるいは難民として戦禍から逃げた先に家庭が崩壊し、家にいたたまれなくなり路上で生活するようになった少年もいる(写真 15)。

ヌルディン(14)は年齢の割に小さい体で路上に寝ていた(写真 16)。父親とともに難民としてベイルートまで逃げてきた。その後、父親が再婚した母親から虐待され、家出したという。ともに<共食>した(写真 17)。

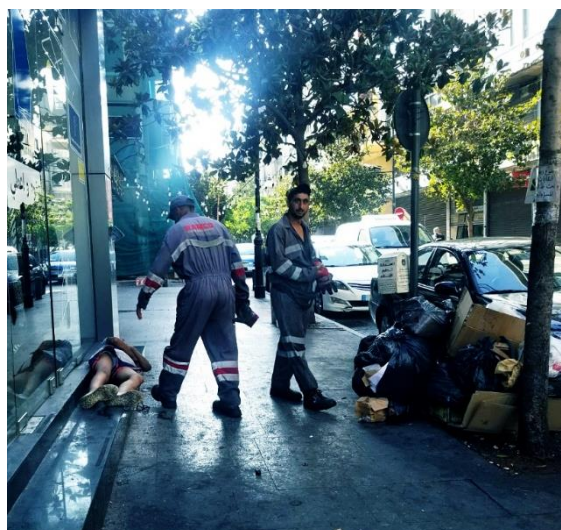


写真 15: ヌルディン(左)に安否確認のため話しかけるごみ収集の従業員
ベイルート 2023年8月9日



写真 16: シリアのヌルディンの虐待された傷口を蠅がなめている。ベイルート 2023 年 8 月 9 日

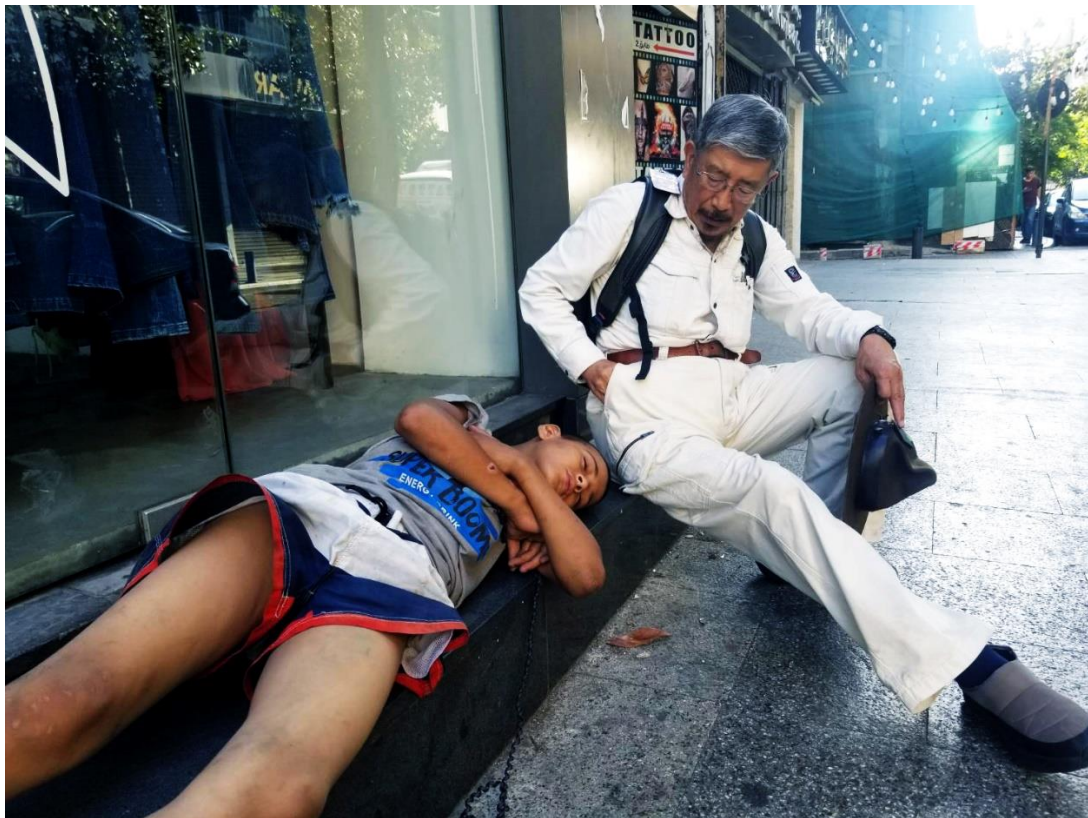


写真 17: 寄り添う ベイルート 2023 年 8 月 9 日

シリア難民キャンプ

ベイルート中心街から 2 時間ほど走ると、預言者エリヤの名前を冠したエリアス (Elias) に出る。最も近い難民キャンプの一つである。

難民キャンプは信じられない状況である。打ち捨てられている。政府に認められていないため、そもそも公的支援から外されている。文字通り、彼らの屋根は一枚の紙切れのようなテントである(写真 18)。



写真 18: 紙切れのような壁と屋根で囲まれた家々(後方)。見送ってくれる子どもたち。

エリアス 2023 年 8 月 16 日

エアコンも何もない、家の中は土足でじかに布団を敷いている。かろうじて生活感を感じさせるものは天日干しにされたパプリカである。母親たちも子どもたちも、口を開けばお金を求める。レバノンとカナダの国籍を持つという高齢女性が難民キャンプから出てきて言い放った。「全員孤児なのよ、あなたになにができるってんだ」。私たちにお金はない(使徒 3 章 6 節)。私たちには何もできないのか。

遠くから難民となった子どもたちは歩いて働き場を求めている姿もある。難民キャンプの間を歩いていた少年たちの中に、親を亡くしたジュマン(14)とサーリ(13)がいた(写真 19)。毎日食べるにも事欠くと、口々に子どもたちが訴える中で、二人は静かになって、だが嬉しそうにお米を受け取った。



写真 19: ジュマン(14) とサーリ(13) エリアス

2023 年 8 月 16 日

近くの別のシリア人の難民キャンプにも訪れた。先ほどのキャンプよりもいくらか小さい。10分の一ほどである。子どもたちが外で遊んでいた。案内人が入っていき話しかけると、ラハブさん(12)が礼儀正しく受け答えた。「父親がいない子どもがいるか」と尋ねると、最初から親がいない子について自分のことより他の子のことを紹介していた。ラハブさん(12)。10人兄弟を持つ。母親は出産を控えている。家計を支え、弟や妹たちを助けようと、ラハブさんは農場で働く。一日 US2 ドルの稼ぎである。学校には行っていない。学校に行くよりも、兄弟のために働いている。ラハブさんは英語を話さなかったが、ボディーランゲージで会話をし、筆者に心を開いてくださった。心を通い合わせてくれ、家に招き入れてくれた。家に電気は通っていなかった。暗い玄関で、ラハブさんにお米を渡した。彼女はすぐにシングルマザーの母親にお米を届けた(写真 20)。筆者に、「また来てね」と招待してくれた。ラハブさんは終始、いさかいを治め、年齢の小さい子どもたちを気にしていた。お金を一切求めなかった。日本から来た客人を歓迎してくれた。言葉が通じなくても心を通い合わせてくれた(写真 21)。彼女の境遇は他の難民キャンプの状況と変わらない。忘れられない。

私たちは何もできないのだろうか。上からの許可がないから助けてはいけないのだろうか。自分の境遇がまだ改善されないから、助けを惜しむのだろうか。



写真 20: ラハブさん(中央) エリヤス 015
難民キャンプ 2023年8月16日



写真 21: ラハブさん(中央)
エリヤス 015 難民キャンプ
2023年8月16日

はたらく子ども

シリア国内アレッポでも、難民キャンプの子どもたちと同様、みすぼらしい、しみだらけの服を着た少年アハマド(13)がアレッポ城を背にしてお金を求めてきた(写真 22)。バヘッド夫妻が丁寧に対応する。彼もヌルディンのように、体躯が小さい。13 歳と思えない華奢な体つきである(写真 23)。路上で暮らす現状を訴え、遠くの木陰から眺める両親のためにお金をせがんだ(写真 24)。

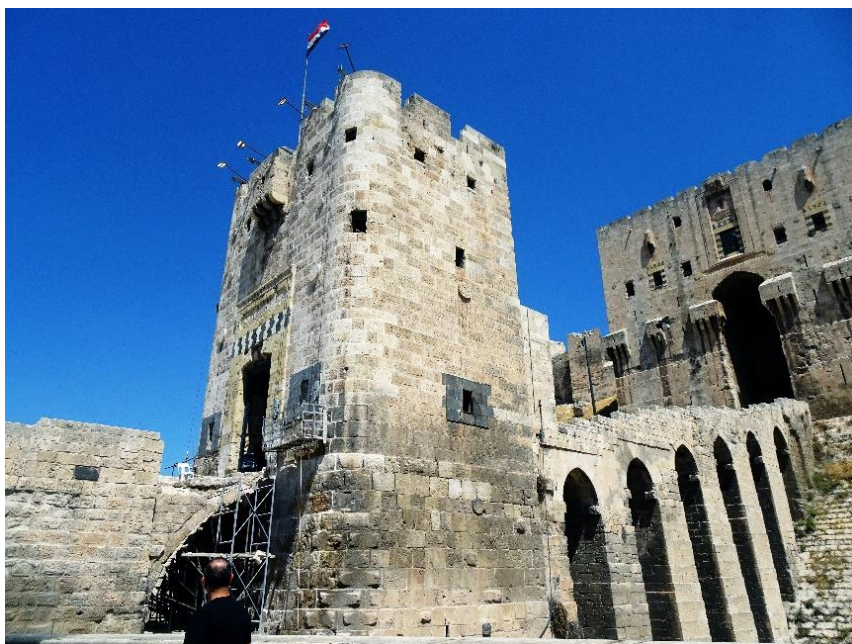


写真 22: アレッポ城。
地震により損壊し、復興作業をしていた。
2023 年 8 月 11 日



写真 23: アハマド(13) 2023 年 8 月 11 日



24: 両親は木陰(右)でアハマドを待つ。

戦渦、占領、制裁の三重苦に降りかかった地震

戦渦、制裁、イスラエル、アメリカ、イスラム国など諸国による〈占領〉、三重苦どころではない状況にシリア全体が瀕している。そこに地震が加わった。アレッポの市民の笑顔はベイルートよりも目立つ。しかし、笑顔の裏に涙が隠れている(写真 25, 26)。



写真 25: 戦渦と地震で損壊した旧市街の建物(後方)と出店(前方)。真ん中に翻るのはシリア国旗。



写真 26: アレッポ市内中心部のアパート。バヘッド夫人の友人マルナ・テネケジアン(50)が一人息子アルバート・テネケジアン(13)とともに犠牲になった。

20代の若者でも、自分たちの国がトルコ、米国をはじめ国々に実質的には「占領」されていること、にもかかわらず外国諸国、キリスト教国をはじめとした人々の無知・無関心に憤りを語る。苦しむ市民に対して何の助けにもならない制裁の下で、市民はすべてのものをシリア国内で賄う。西欧諸国で圧倒的な「正義」の代弁者として君臨し続けながらシリアに介入を続ける米国への強い懐疑心から、現地では US ドル通貨が使われることに抵抗を感じる人もいる。

英語で Old City 旧市街と呼ばれる歴史的な街も被害を受けた。アレッポで生まれ育ったシリア正教会のバハード夫人は述べる。戦渦で奪われ続けているのは町だけじゃない、「歴史も奪われるの。この街(Old City)を見ると、いつも泣きそうになる」(写真27, 28)。



写真 27: 戦渦と地震で損壊した歴史的旧市街 アレッポ 2023年8月11日



写真 28: 戦渦と地震で損壊した旧市街 アレッポ 2023年8月11日

土地は焼かれ、種は途絶える「すべてはフェイク」「私たちが西洋に教える番」

バヘッド夫人の長女であるナタリー(27)はイタリアで学位を取得し、そのままヨーロッパにいたこともできた。「でも西欧ではソーシャルメディアやメディア、娯楽映画といった情報に人々は騙されている。すべてがフェイク(嘘)だと気づいた。だから全部捨ててアレッポに戻ってきたの」。「フェイク」だと気付く人間は少なく、ナタリー自身もシリアに住んでいなければ気づかなかっただろうという。ナタリーは確信をもって語る(写真 29)。



写真 29: 戦渦、地震などの現状を訴えるアレッポ市民と通訳のナタリー。

「どうして西洋から影響され続けたいいけないの？ 私たちには古くからの歴史がある。たくさんいいものを持っている。伝統を保持している。私たちの側の方こそ西洋に影響を与え、歴史や伝統について教えることができる」。

ナタリーは、日本では既に継承が失われ始めている伝統工芸を引き継ぐことを決心し、両親が行う伝統家具を扱う仕事について。日本では西欧の影響を受け、若者は伝統文化の継承に意欲もなく農業従事者もいない。日本の現状を知ると、ナタリーもバヘッド夫人も警鐘を鳴らす。「私たちは爆撃で奪われ始めてから、人々は少しずつ気づいてきた。もう西洋の後追いはしない」。

ナタリーやバヘッド夫人のみならず、人々は制裁下で懸命にやりくりし、豊かに採れるシリアの食事を喜んでいる。ナタリーは菜食主義者だが、シリアの食は菜食主義にもやさしい。季節の野菜、果物がふんだんにある。しかし実際は、町の様子、レストランに並ぶ料理を見ると信じられないことだが、すでにシリアの食の台所、農作物の主要生産地は海外勢力の手中にある。ナタリーは続ける。「農業国だったシリアの農作物を主に生産していた場所があった。そこが今はシリアの人々に届かず、米国に土地を焼かれ、地元作物が二度と生産できないようになっている」と訴える。

だからといって誰が気にするの？ 諦観への抵抗

現地の状況を語りながらも、ナタリーは言った。「でも、だからといって誰が気にするの？ 以前はもう少し希望を持っていたけれど、気にしない人は気にしない。メディアでさえ視聴率を気にして、そして大国の顔色を窺って、現状の被害、悪行を告発しない。」

しばらくして、彼女は続けた。「それでも 0.5 パーセントでも変化があったのなら、それは立派な変化よね」。日本から来た筆者らに言い聞かせるように語った。私たちには現地で小さくされたひとの声を拡声し、預言者のように訴える責任がある。

<結論>

天国へ入るはたらきに特権、差別、ヒエラルキーはない/

日本から、たった一人であってもサマリヤ人として立ち上がる。

シリアのひとびとを抑圧しているのは誰だろうか。シリア国内から、シリア国外の難民の現場から、「小さくされた」側の声を聞き、大国の大きな声をよく見極めて現状を訴え続ける必要がある。キリストを信じる者、聖職者は半死半生の同胞の人を見ても通り過ぎる。無関心なのである。そんな「クリスチャン」があぐらを掻いたままで天国に入るのだろうか。マタイによる福音書 25 章、キリストのたとえは心情の中心にストレートに警告を発する。

ルカによる福音書 10 章で、痛めつけられた異邦人の隣人になったのは誰であったか。隣人になったのは従来のユダヤ教社会で<救われない>敵国サマリヤの人だった。

ルカの福音書 10 章 33 節を開くとはっきりと書かれているが、異端とされたこのサマリヤ人は旅の途中だった。旅人をもてなす、あるいは「寄留者」をないがしろにしてはならないという聖書的基準も聖書の各所に存在する。このサマリヤ人自身こそ、困ったときには助けを求めざるを得ない立場にいたといえる。にもかかわらず、この旅人は聖書のことばを観念で信じているのではなく、実践している。信仰歴が何十年とか、何人をも教会に導いたとか、献金をたくさんしたゆえに評価されている立派なクリスチャン(宗教师)と比べて、本質が問われている模範であろう。

我々は余裕ができるから助けるのだろうか。たしかにコップ 1 杯の水でも与えるならば天に宝を積むことになる。しかし、自分自身の現状如何にかかわらず「憐れに思い」(ギリシャ語 σπλαγγνίζομαι スプランクニツツオマイ <(内臓 σπλάγγνα スプランクナ=心情)まで動かされるの意> *splagchnizomai*, 琉球語「ちむぐるしい」), センサーを研ぎすまし、感情移入をして、実践する助けたサマリヤ人の姿をキリストは諭されたのではないか。

ラハブさんは難民の身で、隣近所の子どものいさかいをおさめ、兄弟姉妹の面倒を見る。

シリアに住むバハード夫妻自身が、被災したその身で、自ら、孤児の世話をすることを買って出てください。世界最大の宗教人口を抱える宗教はキリスト教である。

しかし、シリアの人道的悲劇、アフリカの飢餓⁴。2022 年、キリスト教国同士のロシア・ウクライナ戦争による孤児、戦争や被災により夫をなくした独身女性、高齢の独居者、難民問題が解決するどころか一層拡大していることはどう考えるべきだろうか。ルカ 10 章を唱えているキリスト教会の無力さを証明してしまいか。

ハバード夫妻のようなクリスチャン以外にも、〈天国に入る〉はたらきをしている「カヨ子基金」の協力者がいる。イスラム教徒のライラさんも、自分自身がシリアに住みながら、孤児の世話を請け負ってくれた。アレッポとダマスカスの 356km の僅差にもかかわらず、孤児の世話をなさるライラさんに今回会えずに残念だった。今後も、現地で仕える人々と協力する。

主題聖句は、ヤコブ 5 章 3 節である。「金銀もさびてしまいます」と人類が追い求めてきた富がさびると警告されている。やはり金もさびる(ギリシャ語 βρώσις ブロースィス *brosis* 英語は *rust*)。ヨハネの福音書 6 章 13 節には「さびる」の語源である「食べる」(ギリシャ語 βιβρώσκω ビブロスコ *bibrosko*)が出ている。この世に価値があるとみなされている金貨、金の宝飾品、資産としての延べ棒もいつしか損なわれ、永遠の輝きをもつものではない。文脈のヤコブ 5 章 2 節には「あなたがたの富は朽ち果て、衣は虫が食い」と描写されている。「虫」という日本語訳は無教会の聖書学者関根正雄[1912-2000]によると、ヘブライ語(𐤍𐤑𐤔𐤌 *sas* <衣蛾;衣服(や紙)を食い荒らす昆虫の意>)から「衣蛾」と訳されている。海外ボランティアに出かけると、空港の免税店ではブランドの服、宝飾、香水のお店がひしめきあっており、経済が厳しいレバノンでも繁盛している。どんなに高級な服でも衣蛾が食うのである。シリアの孤児たちに心を寄せてくださる里親が拝金主義のエートスで満ちている日本列島におられることは感謝である。「古びることのない財布を作り、尽きることのない宝を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない」で「天に宝を積みなさい」という他己の精神こそ、今、最も低みに立たれる神仏のご意志であろう(ルカ 12 章 33 節)。

隣人となることを惜しみたくない。

戦争、テロ、大地震の三重苦にのたうちまわっている人々の生きていく道は閉ざされている。現地シリアの全国紙『SANA』紙でインタビューを受けた(写真 30, 31)。地元テレビ局 Suboro TV も日本からの協力に反応し、報道した。日本のみなさまからの救援金に感謝された。

シリア国第 2 の都市アレッポは 70 パーセントが破壊された。孤児の施設を建てるため、ご支縁をお願い申し上げたい。



写真 30: シリア公共放送(SANA)インタビュー。

⁴ 食料安全保障 最新報告書世界で 8 億 2800 万人が飢餓に直面している。

写真 31: シリア公共放送(SANA)。報道は英語でも読むことができ、シリアの現状を知ることができる貴重な情報源のひとつである。

謝辞

日本からの支縁者のかたがたからの支縁がなければ、今回のボランティアを敢行することはできなかった。原稿を、神戸国際支縁機構の村田充八理事に校正していただいた。また本田寿久理事長夫婦，村上裕隆代表，野田健二兄，土手ゆき子姉たちの支えがあればこそ，第 5 次シリアボランティアができたことを感謝申し上げます。